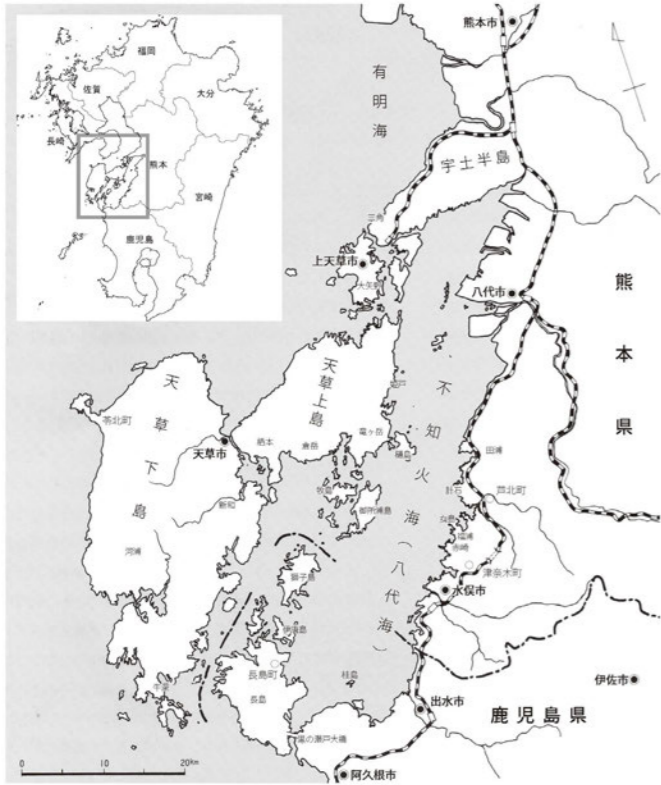


# しづぬいさん



## 紙芝居 解説資料

### 不知火海について

不知火海（八代海）は天草諸島に囲まれた面積約1200km<sup>2</sup>の内海で、熊本県と鹿児島県にまたがっています。水俣市は県境に位置し、水俣の海岸からは、波がほとんどない穏やかな海のむこうに、獅子島や御所浦島などの島々をみることができます。

入り組んだ湾や森が海に迫るリアス式海岸の地形は、海の生き物にとって住みやすい自然環境を作り出し、かつては「魚湧く海」とよばれました。とくに、工場排水が流された百間排水口のあたりは魚がよく育つ場所で、魚をとるために遠くからわざわざやってきて何日も何か月も滞在する漁師たちもいました。



百間排水口

### チッソ水俣工場の水銀汚染

チッソは1932年から1968年までアセトアルデヒドというプラスチックの原材料を水俣工場で製造し、その過程で発生する副産物のメチル水銀が工場から水俣湾に流されました。

汚染が起きていた当時、排水口の付近は水が引くと海の底に黒い泥がたまっている様子がみられ、海辺では腐ったような状態の貝やフラフラと泳ぐ魚もいました。しかし、住民は魚が汚染されていることを知らずに魚を食べ続けました。

水俣病は、メチル水銀に汚染された魚を食べることで発生する健康被害なので、うつる病気ではありません。しかし、最初は伝染病かもしれないと思われたため、患者やその家族は、避けられたり、差別されたりしました。また、猫は人間よりも先に異変が確認されていたので、「猫から人間に病気がうつったのではないか」といううわさもあつたそうです。

#### 参考資料

林野庁編「日本の有名松」、林野庁指導部研究普及課、1959年

熊本県「水俣湾環境復元事業の概要」、1998年

水俣病センター相思社「ごんずい25号」『特集 水俣から環境を考える「まだエンジンの音は聞こえとつと（語り手 杉本栄子）」、1994年

永野いつ香「水俣市茂道における地域変容と住民の生活史」、水俣学研究創刊号、2009年

\*写真は水俣病センター相思社収蔵

### 茂道漁村の山と海

茂道は、水俣市南部の袋地区にある漁村です。

「山があるから魚が寄ってくる場所になった」と茂道の漁師たちは言い、海辺に広がる森は、「魚付保安林」と呼ばれて大事にされています。

1632（寛永9）年、肥後の藩主、細川忠利が水俣の袋地区の海辺に松を植えることを薦めました。住民は松を植えて森を作り、そこで育った「茂道松」は、品質もよく造船材料、建築用材、坑木として使われました。この松の森が、魚の産卵場所や隠れ家になり、魚を寄せる場所になりました。森があるおかげか、海底や海岸に沿ってたくさんの湧き水もあり、昔は集落の住民が湧き水で洗濯もしたそうです。しかし、1970年代にマツクイムシの被害によって茂道松のほとんどが枯れてしまい、今は松林ではなく様々な種類の樹が生えている雑木林になっています。



茂道松のある時代の茂道湾

### 茂道のイワシ網

茂道には、かつて4軒の網元（漁の親方）の家があり、漁を手伝う隣近所の人たち（網子）と一緒にイワシをとっていました。みんなで協力して大きな網で漁をするので、村中が家族のような付き合いがありました。

イワシの群れが湾に入ってきたら、網元がほら貝を吹き網子に知らせました。それぞれの網元は異なるリズムでほら貝を吹くので、どの網元が呼んでいるのかを村の人は知ることができました。昔はすべて人の手が必要だったので大勢が力を合わせて漁をしましたが、今は船も網もエンジンで動かしています。

漁では主に大きな網でカタクチイワシをとり、茹でて天日干しにして、チリメンジャコや煮干しを製造しています。ほかにも、タチウオ、イカ、コノシロ、タイ、チヌ、エビ、タコなどがとれます。



茂道・杉本水産の漁の様子

### 茂道のみかん山

水俣病の被害が確認されてから、海で漁ができなくなった人たちが山を切り開き甘夏みかんの畑を作りました。そして、「被害者が加害者にならない」を旗印に、水俣病の患者たちは農薬をなるべく使わない柑橘類の栽培をしました。いまでも水俣では「公害を経験した地域だからこそ安全な食べ物をつくる」という考えのもと、柑橘類のほか、お茶や玉ねぎなど農薬や化学物質をなるべく使わない農産物がつくられています。



水俣の海辺 みかん山



## 仕切網

1974年1月、熊本県は水俣湾の入り口に仕切網を設置しました(右図の黄色い線)。湾内で捕られた魚は、漁業者への補償の一環としてチツが買い取り、約3000本のドラム缶に詰められて埋立地の一角に埋められています。

1997年7月には、3年連続で水俣湾魚介類の水銀値が暫定基準値を下回ったことが確認され、県知事による安全宣言が出されました。その後、仕切網は撤去され、水俣湾での漁業が再開しました。



「水俣湾環境復元事業の概要」28ページより



上図 赤線がもとの海岸線  
左図 黒枠の中が海底の泥の浚渫(すくい上げること)を行った区域



仕切網をくぐり抜ける魚(1980～90年代)



仕切網の洗浄作業(1980～90年代)

## 水俣湾の埋立工事

水銀で汚染された水俣湾は、1977年から大規模な工事が行われて埋め立てられました。しかし、工事によって汚染を拡大させる可能性があったため市民・患者から「工事差し止め仮処分申請」が行われ、1977年12月から2年半にわたり工事は一時中断しました。工事には約13年の歳月と総事業費485億円が費やされ、1990年に完了しました。現在はエコパークと名付けられた公園に整備されています。

水銀を含む泥は埋められましたが、消滅するわけではありません。埋立地の耐久性は今後40年は問題がないと分析されているものの、その後の対策は考える必要があります。また、地震など災害によって水銀が流出することのないように、将来にわたって半永久的に注意を向け続けなくてはなりません。

現在は、水俣で漁業が行われていますが、昔の水俣湾のような「魚湧く海」は失われ、水揚げされる魚の量は減り続けています。また、漁業者も高齢化による減少が続いています。

現在の埋立地(エコパーク水俣)



埋立前に海底の地盤を固める工事(サンドコンパクション)1980年代前半



埋立地の護岸(鋼矢板シェル)1980年代前半



水俣湾の魚を捕らないように呼びかける看板



水俣湾の魚を捕獲するために集まった漁業者(1980年代と推測)



埋立地に埋められているドラム缶  
撮影 鬼塚巖(1989年10月1日)



ドラム缶に詰められる前の魚の慰霊式(1990年3月)